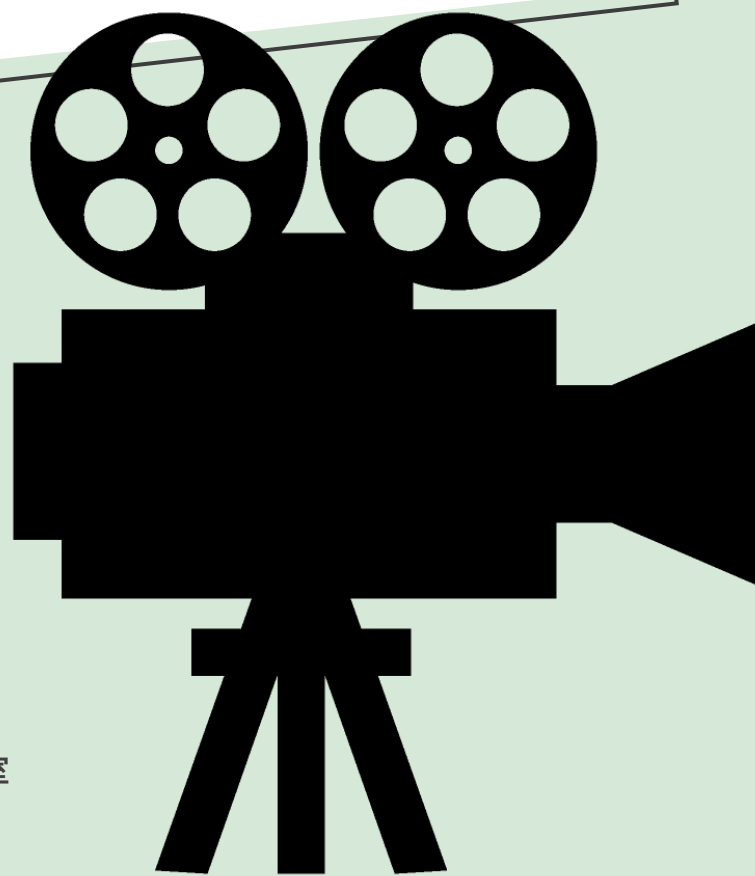


クィア、女性、フランス： クィアな欲望と映画の関係を読み解く

1/25(土)
13:00 START



場所

明治学院大学 白金キャンパス2号館 2401教室

日時

2025年1月25日(土) 13:00～17:45

アジェンダ

- 13:00～13:15 ご挨拶と趣旨説明 斉藤綾子
- 13:15～14:00 菅野優香「クィア・シネマとレズビアン近代——ジェルメーヌ・デュラック再考」
- 14:00～15:30 サプライズ映画上映（お楽しみです！！）
- 15:30～15:45 休憩
- 15:45～17:45 フランス映画におけるクィア作家たち（坂本安美）
登壇者三名によるディスカッション

introduction

クィア映画研究で知られる菅野優香さんが昨年出版した『クィア・シネマ——世界と時間に別の仕方で存在するために』（フィルムアート社）は、映画史において「クィア・シネマ」という概念がどのように言説化されてきたか、世界に対する独自の眼差しと関係性を模索した刺激的な論集である。一方で、LGBTQとしてくられることの多い性的マイノリティの表象の適切さやあるべき姿を模索する動きも近年強く求められている。

こうした流れの中で、今一度「クィア・シネマ」をクィア文化と作家性の問題として捉え、その底辺にある同性愛や欲望、あるいは固定化されない、定義しえない「クィア性」と映画との関係について考えてみたい。さらに、「クィア・シネマ」はその理論や映画作品の多くが英語圏の文化を背景にしているが、近年ややもすれば男性作家主義の伝統が強かったフランスにおいて、フランス語圏のフェミニストやクィア女性作家も注目を浴びている。

そこで、今回のイベントでは、菅野優香さんに基調講演をしていただいた後に映画上映をし、続いて、さまざまな形でフランス映画を紹介していらしたアンスティチュ・フランセの映画プログラム主任の坂本安美さんをゲストにお迎えし、坂本さんにフランス映画におけるクィア作家の最近の動向などについてお話しして頂いた後に、本学芸術学科教員の斉藤綾子と三人で、クィア・シネマとは何か、セクシュアリティ表象、身体と欲望など、さまざまな角度からクィア、女性、フランスについて自由に語り合うトーク・セッションを行います。

panelists

・菅野優香

同志社大学教員。フェミニズムおよびクィアの視点から、映画をめぐるジェンダーやセクシュアリティ、人種の問題について研究を行う。アイデンティティやコミュニティと映画の関係にも大きな関心を寄せ、女性映画祭やLGBTQ映画祭についてのプロジェクトにも取り組んでいる。編書に『クィア・シネマ・スタディーズ』（2021年、晃洋書房）などがある。

・坂本安美

アンスティチュ・フランセ東京映画プログラム担当。「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」誌元編集委員。1996年より旧東京日仏学院にて映画上映の企画・運営を担当。フランスから様々な監督、俳優、映画批評家を招聘し、映画作品とその上映、そして批評との関係をめぐる野心的な企画をオーガナイズし続けている。2014年のカンヌ国際映画祭では「批評家週間短編作品部門」の審査員を務めた。編書に『サッシャ・ギトリ 都市・演劇・映画 増補新版』（梅本洋一著／坂本安美編、ソリレス書店）などがある。

・斉藤綾子

本学文学部芸術学科教員。戦後日本映画における女性像、ジェンダー+セクシュアリティ論、またヒッチコック、ファスビンダー、田中絹代、シャンタル・アケルマンなどの監督・作品論や女優論、女性監督に関する論文やエッセイなど、日英両方で幅広く執筆。『ふえみん』に隔月で映画評を担当。